



全国公立学校教頭会通信 第10号

きずな

第47回 中央研修大会

発行 令和5年2月17日

全国公立学校教頭会広報部

電話： 03-3436-4868

Mail： zenkokyo@kyotokai.jp

HP： <http://www.kyotokai.jp>

令和4年度 全公教第47回中央研修大会(オンライン開催)

1 期日 令和5年2月10日(金) 10:00~15:30

2 方法 ZOOM ミーティング方式

3 概要

開会行事 10:00~10:15

基調講演 10:15~11:45

講師 大分大学大学院教育学研究科教授 清國 祐二氏

シンポジウム 13:00~15:20

コーディネーター 国立教育政策研究所初等中等研究部長 藤原 文雄 氏

シンポジスト 川崎医療福祉大学教授 諏訪 英広 氏

まちと学校の未来代表理事 竹原 和泉 氏

全公教副会長 吉原 勇 氏

閉会行事 15:20~15:30



4 大会趣旨

第12期全国統一研究主題である、「未来を生きる力を育む魅力ある学校づくり」(3年次)のもと、今年度のキーワードを自立・協働・創造としている。研究に際しては、全国共通研究課題6つの視点から継続性 協働性 関与性(3C)に焦点を当て、『個別最適な学び』、『協働的な学び』を推進していくための副校長・教頭の役割をテーマとして実践的研究を進めてきた。

今回の中央研修テーマは、魅力ある学校づくりのための最良のアイテムであり、喫緊の課題でもあるコミュニティスクールを取り上げ、その在り方や実践例を共有することで、副校長・教頭の資質・能力の向上に寄与するものである。

5 基調講演 演題 コミュニティスクールによって何を実現するのか

○現状

・必然性や働き方改革の観点から「地域とともにある学校づくり」が難しくなっている。

○日本財団調査・全国学調・青少年調査等の結果から

・学校は、子どもたちの意識を変え、社会をたくましく生きる力(ポジティブに生きるための社会情緒的能力や非認知能力)を身に付けさせる必要性が出てきた。

○学習指導要領が示すこと

・「よりよい学校教育を通して、よりよい社会をつくる」ために、学校を閉ざすことなく、予測困難な時代にも対応できる力を身に付けさせ、地域の力を借りながら、学びの質、教員の質、経営の質を保証し、「社会に開かれた教育課程」を実現すること。

○「地域のための学校」、「学校が地域づくりの要」となること

・地域の物的・人的資源の活用し、地域とともに・地域に寄り添う学校づくりが不可欠であり、「社会の責任ある形成者」の育成と「知識を使いこなす力」の定着を図っていくことが必要。

○CSの立ち上げ

・子どもや地域の課題を捉え、どういう大人になってほしいのかを明確にすること。

○地域との連携の理想

・子どものことは学校に任せるという意識を変え、一緒に熟議している学校。

・地域との関わりは必然という感覚が出てくれば強靱な学校になる。

○CSは「対話」が大事

・話すことで、理解し合うことが真意であるが、話すほどわからなくなることもある。そこで、距離を置かずに連携・協働していく姿勢を維持すること。

・今の違いを克服していくための方法を考えていくとき、CSで何をすべきかが見えてくる。

- 「社会に開かれた教育課程」の充実のために
 - ・「気持ちのつながりがあるか」「人、物が適切に活用されているか」「お願いして協力してもらっているのか、協働の意識なのか」の検証を
 - ・カリキュラムマネジメントを考えていく上で、「課題解決思考」「子ども中心思考」から出発する。
 - ・複雑な課題は、特定の教育活動では解決しない。地域の力を入れていくことで納得解を探る。
 - ・ICTの活用などで、子どもにも考えさせるような「広がる教育」を

6 シンポジウム

○コーディネーター

学校を切り開くのは、子どもであり、教員である。そのためのツールの一つとしてCSがある。このシンポジウムは、①「CSとシンポジストのこれまでの関わりや苦労話」②「CSでどんな未来を切り開けるのか、どんな役割を果たせるのか、副校長・教頭はどう関わるのか」を通して、CSが単なる地域連携ではないことを明らかにしていきたい。

○①について

諏訪氏：研究者としての立ち位置

- ・研究者として求められる役割は、よい意味でのよそ者、第三者であること。
- ・よく好事例を求められるが、同じ自治体の中でも違いがあるので比較にならない。
- ・協議会には直接参加せず、地域を歩き、人材を探し、協働者として信頼関係づくりに努めてきた。
- ・よそ者、第三者であることを自覚し、あくまでも情報提供と助言を与え、基本的には取組を称賛、リスペクトし、停滞や批判が出てきたときに軌道修正する立場を貫いている。

竹原氏：ゼロからの立ち上げ

- ・CS＝協議機関である。現状や課題を確認し、「地域がやること」「学校がやること」「地域と学校が協働でやること」を明確にすることから始まる。
- ・「課題がない」というのが最も危険。協議には、管理職だけでなく、若い教員、事務職、用務員も発言する場があるとよい。管理職のファシリテーター力が重要。
- ・委員の選定が大事。事務的な部分をできるだけ簡略化し、同調性・対等性をもって、学校のために何ができるかを考える「熟議」できるメンバーを選ぶ。
- ・地域が先回りしすぎず、学校のニーズや実態を捉えながら、小さなことからやっていくことで、信頼関係が構築される。
- ・子どものためという理由で、何でも取り入れてきた学校は肥満気味、CSで優先順位や本当に必要なことを見極めていくこともできる。
- ・子どもにも、自ら考えさせ、責任をもたせて参加させたい。

吉原氏：三鷹市や杉並区での実践

- ・学校が必要とする人材の確保とつなぎ、SNSを活用した情報発信、体験の場を見つける。
- ・副校長・教頭は、地域の教育力を組織化すること。
- ・地域に広げることで、学校でやれなかったものもできることが増えた。
- ・最初は、働き方改革に逆行していた。
- ・学校の教育ビジョンや学校評価項目を一緒に考えた。
- ・学校支援本部との関係を密接にした。本部長が職員会議に参加する学校もあった。
- ・土曜教室や資格試験の監督、地域の森の再活用などを提案し、実践してきた。副校長・教頭は、学校の要望と地域の力を・マネジメントすること。

○②について

諏訪氏：副校長・教頭の役割としてのロールモデルづくりを

- ・教育の質の充実に寄与するもので1ベストはないので、社会に開かれた教育課程、カリマネ、チーム学校、他職種連携・協働などとCSを絡め合わせ、教育素材を提案していくこと。結果、個々の子どもたちの最適化につながればよい。
- ・学校・保護者・地域をつなぐハブとなる。様々な目標やニーズが交錯する中で、結節点を見だし、抽出し、言葉として訴え、教職員につなげていく。
- ・CSで得られる効果。「人に頼ることで新たな思考や方法の発見になる。」「地域の他の大人、異分野の人との関わりが、教職員の視野の拡張、成長機会の拡張などの人材育成になる。」

竹原氏：CSは、大人同士の緩やかな会話の空間づくり

- ・校内にコミュニティスペースを作った。ルールの厳しい学校と比較的緩やかな地域の文化の違いをすりあわせるためにも日常的に交流できる場を作ることも大切。
- ・子どもを置いてきぼりにせず、地域の課題をどう解決していくか、どんな子どもを育てていくのかを明確にし、やれることを絞って、それぞれの立場で、責任をもって実現するという意識の確認の場。それ以外のことは、必要性を熟議する。

- ・CSは「いざというときの大きな味方」「最大の応援団」「辛口の友人」である。学校をバックアップしてくれる存在は、心強いもの。
- ・CSは、学びに向かう力を育むために協働意識をもつこと、学校運営をみんなでやるという意識の醸成が大事。
- ・PTAもCSメンバーであることを説明し、課題を知らせ、解決方法を考えてもらうことも必要。
- ・副校長・教頭は、コーディネーター・ファシリテーターとして、つなぎ手としての立場を自覚すること。雑談力や学び続けるという意識をもつことも大事。(CSもGIGAも同じ)
- ・地域とやることに楽しさやワクワク感が味わえるようになったら本物のCS。
- ・管理職が、CSのことを話すときには、ストーリーテラーでありたい。みんなでつくる主体性の当事者であることを伝えてほしい。

吉原氏：今後どのようにCSを進めていくか

- ・CSは活用ツールである。地域学校支援本部を積極的に利用していく。
- ・教育ビジョンや学校評価項目を一緒に考えていくなどの学校業務の一端を担ってもらう。
- ・市教委に諮っても、学校判断でと言われることも多いので、そのときの相談相手として。
- ・災害時に貴重な助言をもらい、子どもの安全を守ることができた事例もある。
- ・「これをやらないとダメ」のような負荷をかけて組織にしないようにする。
- ・メンバー構成を慎重に行う。学校に関心が薄い住民、理論的・専門的目線の学識経験者などは、注意したい。支援者ではなく、あくまでも協働者であることが前提。

○コーディネーター

- ・副校長・教頭の本来の職務は、全体調整と人材育成だが、どの学校も副校長・教頭が前線に出なければならぬ現状がある。主幹教諭やSSSが配置されているが十分ではない。そのような中で、CSを普及させていくにあたり、働き方改革との兼ね合いも考えていかなければならない。改善策としては、熟議と職員研修のブッキング、年間計画の作成、ペーパーレス化などが考えられる。また、ICTを使ったつながりも模索したい。3人のシンポジストに共通することは、CSから学べることはたくさんある。まさに大人が学べる場でもあるということ。

本中央研修大会の全容を、令和5年2月15日(水)から全公教HPにオンデマンド配信しています。詳細は、そちらを参照ください。